

## 地底恐慌

陽南中学校 2年 黒田 尚志

「はあ。」

ベンチに座つてため息をついているものがいた。空を見上げてため息をついていた。近くを通りかかった男性が隣に座つた。

「こっちも大変だが、そちらの方が大変そうだね。」

「ああ。なんせ食べるものもろくにないからな。」

「まったく。嫌な世の中だねえ。誰も悪くないのに。」

「そうだね。世の中の仕組みを変えていかないといけない。でも、誰もやらないんだよ。」

「僕達で変えるかい？」

「できそうにないよ。」

「そうだなあ。」

今、世の中は食糧不足と仕事の減少により、経済が滞り、大不況に陥つていた。失業者も続出し、社会は混乱していた。

「食糧。少しはとれるのかい？」

「少しはね。でもかなり減つたよ。人口は増えているのに。」

「おかしな話だ。世の中がどう変わっていくのかつてのは分からないね。」

「なんとかならないものかねえ。」

一方、世の中を治める立場の人達も、頭を抱えていた。

「ごほん。まずは一つ目。失業した人の再就職について。これに関しては新しい仕事をこちらで用意するのが良いと思うのだが…。意見が欲しい。」

一番偉い人が言った。

「はい。次の議題にも触れますが、今は食糧が不足しているので、農業をするのが良いかと思えます。」

あまり偉くなさそうな人が言った。

「今回の凶作はそもそも種がないことが原因だ。農家が増えても解決はできない。」

「あ、そうですねえー。」

「まったく…。」

「じゃ、じゃあ、渡し船の船頭たちは、川辺でお茶を育てたら良いんじゃないですかあ？」

「それだー失業した船頭にはお茶を育ててもらおう。じゃあ役人たちは…」

「役人たちは娯楽施設の運営をすればよいんですよーそれで経済を回せば。」

「そうはいかん。経済はそんなにうまくいかない。」

「やってみないとわからないじゃないですか。もう時間はないんです。」

「まあ、そうだな。よし、次だ。深刻な食糧不足について…」

「これはさっぱりわかりません。作物を育てる以前の話ですから…」

「これはごちの世界ではどうしようもない…」

「じゃ、じゃあ、向こうの世界に行ったらどうでしょう？このままでは本当に、この世界が終わってしまいますー！」

「いや、でもそれは…」

「躊躇してはいけません！行きましょう！」

「そうだな…そうだ…。それしかないのだ…。」

「そうですー！」

何か重大な決断をしたようだ…

「私たちはどうなるんでしょうね…」

ベンチに座って話していたとき、放送がかかった。

—— 失業者の方たちに…お知らせが…あります…

「失業者か…受け入れられないな…」

「待って、お知らせだつてさ。悲しむのはやめよ。」

—— 川辺で…お茶を育てる…政策が…

「もう、この際だ。お茶だつてなんだつてやつてやる！」

治める立場の人たちは、洞窟を歩いて地上に上がっていた。今までの出来事は全て地下の話である。

「さあ、この世界の人達に言つてやつてください。これで私たちの運命が決まります。」

「そうだな…」

—— 現世の人達。聴いて下さい。死後の世界の裁判長です。あなたたち現世の人達の睡眠時間が少なくなり、地獄のバクや、鬼や、死者の食糧がなくなっています。現世の人達の寿命が延びて地獄の住民の仕事が減っていることに関してはこちらで手を打ちました。ですが、我々の食糧である「夢」はあなたたちが寝ないと収穫できません。どうか、どうか睡眠時間を増やしてください。お願いします。

「閻魔様、帰りましょうか。」

「そうだな、これで彼らが寝てくれれば…地獄は救われる。」

閻魔様は食糧である「夢」を収穫するために手を打った。死者が減つて職を失った三途の川の船頭は、川辺でお茶を育てていた。裁判官の鬼たちは遊園地や水族館を建設し、運営を始めた。地獄の様子が、少しずつ変わっていく。現世の人達は睡眠不足を切実な問題だと認識したが、それよりも、バクが地獄にいるという事に驚いた。